

## 障害の科学的解明とそれに基づく障害者の理解と支援

中村満紀男

人間総合科学研究科教授 心身障害学専攻長

心身障害学専攻は、東京教育大学におかれた特殊教育学専攻を発展させたものである。特殊教育学においては、盲学校、聾学校、養護学校や特殊学級に在籍する障害児を対象とする特別な教育とその基礎的な内容に関する研究が中心であった。東京教育大学が筑波大学へと発展するなかで、「特殊教育学」もまた発展が図られた。「特殊教育学」は「心身障害学」へと名称を変えたが、それは、対象とする障害種を拡大すると同時に、学校における障害児の教育のみならず、障害福祉や高齢障害をも含むように内容的な拡充を図った結果であった。心身障害学系を中心として、心身障害学の研究・教育に関わる5年一貫制の博士課程心身障害学研究科の設置、障害児教育に関する独立修士課程や、リハビリテーションに関する夜間修士課程でのいち早い取り組みと、次々とあらたな展開がなされ、障害に関連する研究領域の拡充と社会への貢献が図られてきた。

### 心身障害学専攻

現在の心身障害学専攻は、全ての障害種とその関連領域を研究対象とし、博士の学位を授与しうる、我が国最大の研究・教育組織である。本専攻は主要分野として、視覚・聴覚・知的・発達・行動・運動・健康・高齢・音声・言語の各障害学と、障害原理論から構成されている。各障害学にあつては、それぞれの障害に関する教育学、心理学、病態生理学の側面から科学的基盤に基づくアプローチがなされており、障害原理論においては、障害カテゴリー別の知見を横断的・総合的に捉え、障害のもつ個人的、社会的、文化的な意義を研究している。本専攻は、障害を中核とする多様な研究対象を包含しており、また、方法的にもさまざまな手法を専門とする多くの教員から構成されている。したがって学生は、各自の専門とする障害領域だけでなく、関連する分野についても幅広く学習し、障害の本質に

迫ることが可能となっている。近年では、障害者の自立や社会的認識も高まり、障害に関する研究や実践も一般的な注目を惹くようにはなってきたが、高校生までの段階では心身障害学に接する機会は少なく、大学や職場で障害児や障害者と出会い、新たな学習・研究の対象として心身障害学を選択する者も多い。このような背景から、本専攻では、心身障害学以外の専門分野からの学生も含め、全国から障害研究を目指す学生が集まり、活発な学習・研究活動が展開されている。

### 近年の関連分野の変化

近年の特殊教育から特別支援教育への展開は、心身障害学の対象領域をいっそう広いものとしてきている。従来の特殊教育関連教育組織に在籍する子どもや就学前および卒業した子どもだけでなく、通常の学校でさまざまな困難をもちながら学習・生活している子どもたちをも支援の対象に含むことになる。このような対象の広がりにより、特別な教育・支援ニーズをもつ子どもたちの実態に関する客観的な評価と、それに基づく適切な対応を模索していく上でも、これまで行ってきた基礎的、応用的な研究に加え、今まで以上に実践性を視野に入れた研究の展開と研究者や高度職業人の養成が求められている。

### 心身障害学専攻の改組再編と背景

このような幅広い社会的ニーズの広がりに対応するためには、現在の研究・教育組織をいっそう効率的に運用することが必須となる。現在の心身障害学関連の研究・教育組織は、独立した修士課程と、5年一貫制の博士課程が並立されている。発足当時は、それぞれの組織が、入学対象とする学生とその育成・就職について、独自の構想のもとに対応がなされていた。しかしながら、現代社会での課題に対して、応用科学としての実践性を求める社会的ニーズは、既存の修士課程と博士課程での人材養成の目的や内容を近似させてきている。このような状況の変化は、心身障害学に携わる教員が協力し、両課程の効率的・効果的運用を図り、今後の社会的ニーズに柔軟に対応していくことを要求している。

一方学生の側からみると、近年の職業選択の多様化から、5年制博士課程は年限の長さのため受験時の抵抗が大きく、研究者や高度職業人への進路選択における高い自由度が求められてきている。また、専門的な知識や技術のいっそうの高度化から、心身障害学における博士（後期）課程への社会的ニーズが高まってきており、これに対応するための課程の充実が期待されている。

## 専攻の今後の方向性

このような背景から、博士課程人間総合科学研究科心身障害学専攻と修士課程教育研究科障害児教育専攻では、両組織を再編統合して人間総合科学研究科障害科学専攻とし、2年制の前期課程と3年制の後期課程を設置する計画を進めている。前期課程では、障害者教育学、障害臨床学、障害福祉学の教育研究領域をおき、障害科学とその関連領域に関する基礎的および実践的側面を重視した教育研究を行う。後期課程には、障害支援分野と障害基礎科学分野をおき、障害支援分野では、障害者の生涯にわたる教育・福祉や教育・福祉を支えるシステムに関わる研究を推進し、障害基礎科学分野では、障害心理学・生理学、障害臨床学、障害原理論を中心として、応用的側面を見据えた基礎的知見の解明に重点をおく。さらに、現在の両専攻の資産である障害種別・障害原理の領域および障害児教育の領域に加え、新たに、近年の課題となっている、発達性高次脳機能障害（LD、ADHD 等）、重度・重複障害、国際障害者教育開発、障害学生教育支援、特別支援教育システム等の領域をおき、新たな研究の展開を強化する。

このような大学院修士課程と博士課程の一元化による運営上の効率化を通して、現代の社会的ニーズに応じた新しい研究・教育成果を生み出すことができると考える。

また学類・学部からの進学者で、研究あるいは実践的志向それぞれのニーズを有する学生が、前期課程での学習を経てよりの確にその後の進路を選択でき、後期課程への進学や、各学生の個性に応じた確な進路選択が可能になると考えられる。さらに、近年の博士学位取得の需要の高まりから、博士後期課程を独立させることにより、他大学の修士課程を修了した学生を積極的に受け入れることができるようになり、この分野における国内で数少ない博士（後期）課程を有する大学院としての責務を果たすことができるし、同時にこの分野の、将来における研究の充実発展をいっそう推し進めることができるようになるであろう。

（なかむら まきお／障害原理論）